



英国小児ホスピス Helen & Douglas House (ヘレン&ダグラスハウス) の緩和ケアを体験して

新潟病院 副看護師長 白井 良子 看護師 小川 千里

当院では、英国の緩和ケアにおける看護の役割と、多専門職種ケア (multi-professional care) の考え方、在宅ケアの実際を学ぶため2010年から英国研修を実施しています。今年度は3回目となり8月20日(月)から29日(水)までの10日間、2名の看護師が小児緩和ケア発祥の地オックスフォードにある Helen & Douglas House (ヘレン&ダグラスハウス) での臨床配置実習に参加しました。

「ヘレンハウス」は1982年修道女であり看護師でもあるシスター・フランシス・ドミニカによって設立されました。脳腫瘍の2歳の女の子を在宅で昼夜問わず看病していた疲れ切った両親を休ませてあげようと、女の子を預かり世話することを申し出たことが小児のホスピスの始まりであり、この女の子の名前が「ヘレン」だったのです。この活動が世に知れ、重い病や障害を持つ子供たちやその家族のためのケアハウスが必要だという気運が高まり、シスター・フランシス・ドミ

ニカを中心に世界で初めての小児ホスピス「ヘレンハウス」が誕生しました。その後、2004年に若年成人(18歳~40歳)を対象にした「ダグラスハウス」を併設し、現在は「Helen & Douglas House」として運営されています。

研修前は、週1回の英会話レッスンや英会話教材を活用して英会話能力を高め、当院の紹介プレゼンテーションも英語で準備しました。実際にヘレンダグラスハウスのスタッフの前で行った英語でのプレゼンはとても緊張しましたが、日本の看護にとっても興味を持っていただき、たくさんの質問を受けました。研修の間は、オックスフォード中心部からバスで15分ほどのホテルに宿泊し、ヘレンダグラスハウスまではバスを乗り継いで片道30分ほどかけて通いました。ロンドンのバスはとても便利ですが運行ルートがとても複雑で、目的の場所にたどり着けないこともあり苦労しました。オックスフォードの町並みは重厚で美しい建物が多く、研修を終えた後は散策を楽しむことができました。また、パブの料理やアフタヌーンティーはとてもおいしく満足できるもので、緊張の毎日の中でリフレッシュできました。

研修内容はスタッフと同じ早番と遅番のシフトで8日間、指導者と一緒に担当患者のケアを見学・実践しました。食事・清潔・排泄ケアなどの日常生活の援助や胃腸栄養の介助、特に、ホイスト(日本では天井走行型リフトと呼ばれています)を活用した移動援助は大変スムーズな動きで、患者にとっての最も必要な安全、安楽が保障されていることを実感しました。英国では在宅やホテルなどの公共の施設にもホイストの設置が進んでおり患者の社会参加の支援、活動を広げる支援につながっているとのことでした。また、緩和ケアというと日本では“がん患者”と思いがちです



【ヘレンハウスの入り口にて】

左から 教育担当 アリソン レイ看護師
新潟病院副院長 中島 孝医師
シスター・フランシス・ドミニカ
筆者 小川 千里
筆者 白井 良子

が、英国では重度の障がいを持ち予後が限られた子供たちも緩和ケアの対象であるという認識が社会の中で浸透しています。ヘレンダグラスハウスでも利用者の8割は神経・筋疾患の患者や重症児であり、生きる楽しみを支援することに加え、五感への刺激により成長・発達を促す支援を行っていました。身体的・精神的・社会的・スピリチュアルなサポートに加え成長・発達の支援が必要な小児の緩和ケアは本来、専門性

の高いマルチプロフェッショナルチームケア（多専門職種チームケア）であり、日本でもこのような発想でさらにケアの質を向上させていく必要があると考えています。研修では大変充実した日々を過ごすことが出来ました。

この研修はこれからも継続していきます。今回の貴重な体験をたくさん方へ情報発信し、緩和ケアや在宅ケアについて考えていきたいと思います。



【ヘレンダグラスハウスの看護師等のスタッフの皆さんと】



【名物の2階建てバスで通勤しました】
イギリスでは、手を水平にあげてバスの運転手に意思表示しないと止まってくれません。



【ホイスト（天井走行リフト）の研修】
1時間の講義・演習を受けてから実際に援助させて頂きました。



【ホイスト（天井走行リフト）】
全室個室で、天井にホイストが設置されています。
部屋毎に家具やリネンなどが違います。